

映画に学ぶ臨床心理学

— 「自分らしさ」の発達 —

恒吉 徹三

Learning Clinical Psychology from the Cinema: Development of Self

TSUNEYOSHI Tetsuzo

(Received August 5, 2008)

キーワード：映画、自分、臨床心理学

はじめに

臨床心理学の概念や理論を学ぶさい、映画などの視覚的な媒体を講義で用いる意義について、講義の構造との関連、いくつかの精神分析的概念について、これまでも検討してきた(恒吉、2002：2004：2005)。本稿では、「自分らしさ」の発達という観点を理解するのに有用であると考えられる4本の映画を取り上げて、その内容を検討することが目的である。

ここでいう「自分らしさ」とは、自己のアイデンティティと言い換えることもできる。エリクソンが社会との関わりを重視しているように、個人内だけで収まりのつく概念とは異なり、他者との関わりも含んだものである。

1. 『サイドカーに犬』にみる“new object”とその移行対象的側面について

1) 粗筋

映画『サイドカーに犬』(監督：根岸吉太郎，脚本：田中晶子，真辺克彦，製作：若杉正明，細野義朗，柳田和久，プロデューサー：田辺順子，原作：長嶋有)は、竹内結子主演で、キネマ旬報賞を受けるなど注目された映画である。ここに描かれているのは、小学校が夏休みに入ると母親(鈴木砂羽)が家出し、残された子どもたち(姉の薫と弟の透)とその世話をする父親の愛人との物語である。物語は、小学4年生の近藤薫(松本花奈)と愛人のヨーコさん(竹内結子)のふたりを中心にすすんでいく。そして、夏休みが終わるころにはヨーコさんはまたいなくなるのである。以下に、粗筋を会話も一部は具体的に示す([]は、筆者の理解を示している)。

後藤薫(10歳)は小学校4年生の女の子である。夏休みに入ったところで、母親良子が家中の掃除をして翌日に家出をしてしまう。夫の誠(古田新太)が会社を辞めて自営業(中古車販売)をはじめたこともそのきっかけの一つのようである。そこへ、ヨーコ(洋子)さんという女性が突然「オッス、っていうかはじめましてか」とやってくる。まず、薫を連れて買い物に

ヨーコさんは出かける。ヨーコさんは、自分から自己紹介して、薫の名前を聞くと「美しい名前だね」という。スーパーでは、薫の好きな“麦チョコ”2袋を買い物カゴに入れる。それを、あつげにとられたように薫が見ている。[母親はこんなにあつさりとは買ってくれないであろうことが推測される]。夕食後に、麦チョコをカレー皿に[まるでドッグフードのように]入れて「ほれ、エサだ」と子どもたちに出す。薫は「それ、いいのかな」と困惑するのでヨーコは「何が？」と聞き返すが返事はない。弟と2人の会話の中で「カレーのお皿に麦チョコよそって、お母さん見たら怒るよね」と薫が言う。[ここには、母親がふだん子どもに厳しい様子がより具体的にみえてくる]

帰宅するヨーコを外まで見送る父親との会話のなかで、薫は小学校2年生のときに自転車を買ってもらったのだが、乗れなかったことが話題に出ている。ヨーコと買い物に出かけるときには、薫は自転車に乗る事ができる、と答えていたのだった。また、ヨーコは、自分の自転車のサドルを取られて、隣の自転車のサドルを取り付けて乗って帰ったことも話題となっている。

コーラは「歯が溶ける」と学校で教えられたので飲んだことがないという薫に、ヨーコは、「私も中学生のとき言われた。じゃあ、石油はあと何年でなくなるって教わった？」と質問する。薫は「30年」と答える。ヨーコは、「私も30年って教わった。あれ～、変だね。」と言い、「飲んでごらんよ」とコーラをすすめ、薫も飲む。[大人が言う事をその言葉のままに受け取らないで自分がどうしたいのかが大事、ということをやヨーコは薫に伝えているようにも思う。]さらに、ヨーコは、自転車に乗れない薫が、自転車に乗れるよう特訓する。特訓が終わると、薫はヨーコに自転車のサドルが盗まれたときのことを尋ねる。[このやり取りには、2人の関係のありかたや、ヨーコの子どもに対する真摯な態度や、言葉のセンスが盛り込まれている。この部分は、カウンセリング的な応答に近いものであり、後に検討するため詳しく取り上げる。]

薫：前に、サドル盗られたって言ったよね。

ヨーコ：言った。

薫：隣の自転車のサドル取り付けて帰ったって。

ヨーコ：言ったよ。

薫：その盗られた人はどうしたの。やっぱり別の人のサドル取り付けて帰ったの。

ヨーコ：・・・、そうか、そういうことが気になるのか。薫は、薫って呼んでいい。

薫：いいよ。

ヨーコ：そういうとき、薫だったらどうするの。

薫：・・・(沈黙)

ヨーコ：人は正直であろうとすると無口になるって何かで読んだ。でも、そういう人はなかなかいないし、私もなれない。だから、尊敬する、薫のこと。

(30歳になった薫の声で)「母が出ていったことについて父は何も言わなかった。ヨーコさんがどこからやって来るのかはわからなかった。ふだん何をやっているのかも知らされなかった。」とナレーションが入る。[ここには、ヨーコさん、という人の素性のわからなさ、不思議な存在であることがうまく表現されている。個人的なことは言わないという面接者のありかたと通じるところがあり、薫にとってヨーコさんをより魅力的な存在にしている部分だともいえる。]

あるとき、父親がヨーコさんともめていると、薫はカーテンを洗濯する、とカーテンをレー

ルから外し始める。[母親は家出する前日に掃除をしていたことを思い出させる場面である。] またあるとき、ヨーコは薫を連れて他人の庭に勝手に入ってみせたりもする。あまり人にものをねだらない薫にヨーコは、「薫はさ、おねだりとかしないんだね」と話しを向ける。薫は「前に一度だけネコを飼いたってお願いしたことがある。」と答えるが、「飼えたけど、すぐいなくなっちゃった。たぶん、こっそりお母さんが遠くへ捨てたんだと思う。」と経過を語る。

その後、ヨーコさんの「夏休みにつきあって」の一言で、ヨーコと薫は、ヨーコが小学校6年のころ、家族と旅行にいったという海辺へと出かける。民宿の主や女将と話しているヨーコをみた薫は、「知らない人みたいだった」「どうしたらいいのかわからなくなる」のだとヨーコにもらす。[徐々に、不思議なヨーコさんが、大人の一面をもっていることに気づいていく。]

2) “new object” の移行対象としての側面

ここでは、“new object” とその移行対象的側面という観点から検討する。ここでいう“new object” とは、「父母とはちがった発達促進的な新しい対象」(乾, 1980) のことであり、年長の姉的存在の人物のことをさして使われている。映画の中のヨーコさんが薫にとっての“new object” だということができ、厳しくしつけてきたと思われる母親とは異なり、また、職業や住まいさえもわからない不思議な存在として描かれている。母親であれば怒り出しそうなことを平気でやってのける。これまで乗れなかった自転車も、一緒になって特訓してくれる。この特訓の後の会話は、特に重要である。ヨーコが以前自転車のサドルを取られたときに、隣にあった自転車のサドルを取り付けて帰った、という話をしたことについて薫が、「その盗られた人はどうしたの。やっぱり別の人のサドル取り付けて帰ったの。」とヨーコに尋ねる。カウンセリング論(学部2年生対象)の授業でこのシーンを上映した。授業後の感想に、多くの学生はヨーコのように子どもの問いかけには答えられないだろう、と書いていた。ヨーコは「・・・、そうか、そういうことが気になるのか。」と答えるのである。このようなやり取りは、面接者がクライアント(来談者)から質問されたさいに、相手の意図を十分に考えることもなく単純に答えるのではなく、相手の意図や注目していることをクライアント自身が気づくような働きかけであり、カウンセリング的であることを授業では解説した。これによって、実際のカウンセリング的なやりとりを実感しやすい題材となった。

さらに、ヨーコのお不思議で魅力的といえる存在は、次第に両親と同じように大人としての一面もあることにとまどいを示す場面も描かれている。しかも、急激に大人の一面をみるのではなく、父親とのケンカや、旅先での他人とのやりとりへと物語が進行するなかで、徐々に感じとっていき姿が描かれている。ヨーコは、はじめ“new object” として登場するが、関係が継続すると次第にごくふつうの大人の存在としても描かれるのである。つまり、10歳の少女にとって初めは魅力的で理想の「姉」的对象として感じられていたのが、同時に両親と同じ大人としての一面も持っている対象であることにも気づくのである。この過程は、理想化されていた対象の「脱錯覚」の過程が描かれていると理解することができる。ゆっくりとした時間のおかげで、薫は、初めは“new object” としてのヨーコと関わりもち、その後、大人としての一面をもった存在としてとらえるまでの間の移行対象としてもヨーコは存在しているのだと理解することができる。つまり、“new object” は、移行対象でもあると理解することができる。このような観点について、この映画はより具体的に理解することを可能にすると考えられる。

2. 『西の魔女が死んだ』にみる自己の成長過程：合わせることから自律へ

1) 粗筋

映画『西の魔女が死んだ』（監督：長崎俊一，エグゼクティブ・プロデューサー：豊島雅郎，プロデューサー：柘植靖司・谷島正之・桜井勉，製作統括：小川真司，脚本：矢沢由美・長崎俊一，原作：梨木香歩）は、「まい」（高橋真悠）という中学1年生の少女を主人公とした、「西の魔女」（サチ＝パーカー）と呼ばれる祖母との関係を中心に描いたものである。ある日、まいは学校に行けなくなる。母親（りょう）は、自宅から離れたおばあちゃんの家でまいを過ごさせることにする。おばあちゃんは、イギリス人で、結婚して日本に暮らし、自給自足に近いような生活を営んでいる。両親もおばあちゃんも、まいが学校に行かない理由については何も問うことがない。おばあちゃんの家は、山奥にあり、近くには離婚して帰ってきたというゲンジさん（木村祐一）が住んでおり、おばあちゃんの家を庭仕事を時々してくれる。ゴミの日にゴミ捨て場に無造作に捨ててあった女性のグラビアを目にしたまいは、ゲンジさんが捨てたものだと思って、気持ちを乱されて家に走って帰る。まいにとってゲンジさんは無骨で不快な存在にみえている。あわてて帰ってきたまいにおばあちゃんは、洗濯の手伝いをさせる。

おばあちゃんは、まいに魔女になるための「基礎トレーニング」をするようにいい、そのためには、早寝早起き、食事、運動、規則正しい生活をして、精神を鍛える必要があるという。魔女になるには、意志の力が必要で、何でも自分で決めて最後までやりとげることが一番大切なことだということである。

朝起きると散歩にでかけたり、おばあちゃんと一緒に野いちごを摘んでジャムを一緒に作ったりしながら過ごす。洗濯するにも、たらいの中に水を張って足で踏み込むなど体を動かすことが基本の生活である。一方で、おばあちゃんと布団の中で一緒に寝ながら、まいは「死んだらどうなる？」とおばあちゃんに問いかける。おばあちゃんは「死んだことがないからわからない」と答えるが、以前父親は、死んだら何も残らない、他の人はふつうに暮らす、と言われたと言って涙する。するとおばあちゃんは、「おばあちゃんが信じている話をしましょう」と魂が肉体を離れて自由になる、という考えを伝える。まいは、学校を休んでいる理由を両親もおばあちゃんも聞かないことを話題にし、入学した当初は皆に合わせて行動していたが、そのうち止めたところ、皆から無視されるようになったという経緯を話す。これを聞いたおばあちゃんは、「自分が楽に生きられる場所を求めたからといって、後ろめたく思うことはありませんよ。ハワイより北極で生きるほうを選んだからといって、誰がシロクマを責めますか」と、学校へ戻ったときにどうするのかわからないというまいに言う。

まいは裏山に「まいサンクチュアリ」という場所をおばあちゃんからもらう。じっくり座って思索できる場所である。そのすぐそばの土を、ゲンジさんが掘り返している場面にでくわして、怒りにあふれて帰宅する。おばあちゃんはとりなしつつ、つい手も上げてしまう。これがきっかけで、まいが自宅へ帰ることになったときにもわだかまりを残したままとる。今の家を引っ越すことを両親が決め、まいも一緒に引っ越すことになる。その後、おばあちゃんの訃報がまいに届くことになる。おばあちゃんの死にさいしては、ゲンジさんら近所の人たちが身の回りのことなど急の対応をしてくれていた様子も描かれている。

2) 「合わせる」から自律への過程：一時的な退避と重層的な構造の中に抱えること

まいの不登校は、友だちとの関係に過剰に合わせすぎたことから自分を見失い、自分を取り戻す努力の結果としてとらえることができる。カウンセリングに来談する多くのクライアント

が、『自分がない』と言うことについて、日本語臨床の観点から検討されており、自分が自分らしくいられるための場所が必要であり、これが居場所（北山，1993）と呼ばれている。この場所を、おばあちゃんの家滞在するなかで得て、自分を取り戻していく過程が、映像として端的に描かれており、周囲に合わせることで自分らしくあることの折り合いの難しさについて理解を深めることができる。自分をとりもどすには、自分を見つめなおす時間や場所が必要だが、一時的に現実状況そのものから退避することも時には必要となる。これを、筆者は社会的なあたりかたにまみれた自分の「垢落とし」ととらえている。不登校状態になると、多くの子どもたちは昼夜逆転の生活を送り始め、回復過程では、生活リズムも以前のように戻ることも多いためである。そのためにも、一度は外に合わせることを止めて内にこもるという意味で使っている。映画の中では、おばあちゃんは、シロクマが北極で生活することを選んだからといって誰も責められない、とたとえてまいに伝えている。だが、まいは、ただ単に現実の中学校生活から退避したわけではない。おばあちゃんにすすめられて、「魔女修行」をし、日課も自ら作って、自然の中を散歩し、おばあちゃんと作業をして過ごすのである。

原作の解説に早川司寿乃（1994）は、「おばあちゃんがまいに施した薬は、人が永い間に自然から教わり受け継いできた知恵や、生活の基本をみせることではなかったでしょうか。」と指摘し、ジャム作りや洗濯などを例にとりあげている。さらに、「自然の中で規則正しい生活で、まいの生物としてのリズムが目覚め、体と心がしっかりしてくると同時に、まいの「魔女修行」は始まりました。この、その人の持つ素質を伸ばす・自分で考え自分で決めるという魔女修行は、本来の人らしい人になるということなのかもしれません。」とさらに述べている。また、原作者の梨木（2004）はエッセーの中で、作業を他者ととともにするといった発想について強調し、精神科医神田橋の発言も引用しており、作品の中に、心理療法的視点が盛り込まれていることもうかがわれる。精神分析的な発想でいえば、「抱える環境」として、自然とおばあちゃんの家とおばあちゃんは機能しており、さらにその中でまいに生活全体を自ら構造化させているととらえることができる。このような治療構造論的観点について狩野（2007）は、メンタークリニックでスーパーバイザーに“highly structured treatment setting”（治療構造）とは何かについて質問し、1枚の紙に書いた1週間のスケジュール表を見せられたというエピソードを書いている。このスケジュール表こそが「高度に構造化された治療設定」であり「時間と空間の構造化」であることを指摘している。つまり、まいは、重層的な構造に抱えられて、枠組みの中でさまざまな行為を安全にとりおこなうための配慮のもとで暮らしていると理解することができる。この映画では、まい自身が自らの日課を取り決めていくのであり、自律的な営みとして位置づけられている。この点では、狩野（2007）の引用は、境界例治療を想定してのものだが、まいは健康度の高い中学生であり、自らスケジュールを立てること自体にも意味あると考えることができる。言い換えると、受身的に他者に合わせてきたまいが、自らが世界と関わるあたりかたを規定して生活する。さらに、自らの「死」についての疑問も、抑えつけることなくおばあちゃんと話す機会も得る。このような時間の中で、次第に自分自身を取り戻し、成長したものととらえることができるであろう。

この映画の中でゲンジさんが果たしている役割についてもふれる。ゲンジさんには、まいの父親が知的に描かれているのとは逆に、たくましくより身体的で欲動的な側面を感じさせる存在感がある。勝手にまいの居場所に立ち入ってきたりもする。まいは、最初は受け入れがたいゲンジさんの一面ばかりに目を奪われていたが、おばあちゃんの家を離れて中学生生活を送り、おばあちゃんが他界し、再びおばあちゃんの家にもどってきたときに、まいは、ゲンジさんを

外見だけで判断することなく、やさしさも感じ取ることができるまでに成長していた。以前は、他者に合わせて他者のことさえ見失っていたまは、自己と対象のさまざまな側面を理解して関わりをもつことができるまでに変化をとげている。

このように、自分らしくあることをつまずきと、そこからの成長や、思春期における死が身近であることなどを理解できる映画である。

3. 『しゃべれども しゃべれども』にみる自分らしくいるということ

1) 粗筋

この映画『しゃべれども しゃべれども』（監督：平山秀幸，エグゼクティブ・プロデューサー：豊島雅郎・藤島ジュリー K.・奥田誠治・田島一昌・渡辺純一・大月昇，プロデューサー：渡辺敦・小川真司，脚本：奥寺佐渡子，原作：佐藤多佳子）は、売れない落語家今昔亭三つ葉（国分太一）のもとに集まってきた、うまくしゃべれるようになりたい3人（原作では4人）が、落語を習ううちに、上手にしゃべれるようになる、ではなく、それぞれがそれぞれの自分らしくいることに気づいていく過程を描いた物語と理解することができる。

関西から関東に引っ越してきて言葉の違いから友だちからからかわれている村林優（森永悠希）。三つ葉の祖母（八千草薫）の茶道教室の教え子が、村林の母親から「気の利いた話し方」を教えて欲しい、とこの落語教室は始まった。そこに、無愛想で「どうやったらしゃべれるの」「口の利き方」を教えて欲しいという十河五月（香里奈）、「うまくしゃべれるトレーニング」をやっていると聞きつけてきた元プロ野球選手の湯河原太一（松重豊）が加わる。湯河原は、今は野球解説者をしているが、野球の解説になると何もしゃべることができなくなる人物である。

3人は、『まんじゅうこわい』を覚えることになるが、関西弁の村林にとって「東京の言葉」はわかりづらく落語にも興味を持たない。そこで、三つ葉は朱雀師匠の上方版の『まんじゅうこわい』を優に見せると優は歓喜し、落語にすっかり引き付けられて上方版を覚える。一方、三つ葉は、師匠の今昔亭小三文（伊東四郎）の落語を熱心に真似るのだが、客にはまったく受けない。一門会が開かれることとなり、師匠の十八番『火焰太鼓』に取り組む。これがきっかけになり、真似ではない、三つ葉自身の落語へといたっていく。

三つ葉の3人の弟子たちの発表会を開くことになり、十河は、一門会で三つ葉が披露した『火焰太鼓』を、村林は上方版『まんじゅうこわい』を披露する。村林をからかっていたクラスのリーダーも笑わせることができ、会は成功して落語教室も解散となる。

2) 自分らしくいるということ：自己の変容過程について

この映画のひとつのテーマは、自分らしくいることだと考えられる。主人公は、しゃべれども、しゃべれども落語の上達しない落語家の三つ葉であるが、そこへ、自分自身の言葉がうまくしゃべられなくて、自分を変えようとして落語を習いに3人の人物がやって来る。3人は、一生懸命になって落語の練習をするが、それで人が変わるわけではない。三つ葉も師匠をまねするが、いつもお客は聞いてすらいない。それでも、三つ葉も3人も落語を止めないのである。この物語の結末では、だれもがうまくしゃべれるようになった、というわけではない。野球解説者から2軍のコーチになったり、江戸版ではなく上方の落語を覚えたり、師匠の真似ではな

く自分の落語ができるようになる。つまり、それぞれがそれぞれの持ち味やしたいことを続ける方向へと変化するのである。この過程は、カウンセリング場面に、「人とうまくしゃべれない」とやってきたクライアントが、話し方を練習するのではなく、自分自身のことを見つめなおすことを通して、人との関わりがもてるようになっていく、ということと重なり、映画を通してカウンセリングのプロセスや、人が変化していくという過程のひとつのありかたを理解することができる。ここでの変化は、問題そのものがすべて解決したわけではなくても、その問題の背景にあった自分自身のありように変化が生じて起きたと理解することができる。つまり、自分がどんな人間であるのかを抜きにして、まったく違う自分に変わろうとしていた事自体に無理があったのだということもできる。自分自身へのとらわれから自由になり、結果的には以前よりは話がしやすくなっている、という経過としてとらえることもできるであろう。

このように、自分らしくなっていくことの過程を、いわばカウンセリング過程で生じる出来事を、この映画をみることでより理解しやすいものとすることができると考えられる。

4. 『憑神』にみるアイデンティティ形成のプロセス：自らの「分」

1) 粗筋

この映画『憑神』（監督：降旗康男，プロデューサー：妹尾啓太・鈴木俊明・長坂勉・平野隆，脚本：降旗康男／小久保利己・土屋保文，原作：浅田次郎）は、将軍の影武者を先祖代々受け継ぐ家系の次男、別所彦四郎（妻夫木聡）が主役の映画である。彦四郎は、学友が向島にある「三囲（みめぐり）稲荷」に祈願して出世したことを聞きつけて、酒に酔って転げ落ちた藪の中にあつた「三巡（みめぐり）稲荷」に出世を祈願する。すると、最初は、貧乏神の伊勢屋（西田敏行）に取り付かれ、家は俸禄米を凍結される危機に陥り、貧乏神を説き伏せて義理の父親（元妻の父親）に宿替するようにと頼む。その結果、離婚した妻子がともに焼け出されるといふ不幸に見舞われる。自分から祈願して招いた災難であるのに、「お前のやることはひどすぎる」と貧乏神を彦四郎は責める。次に、疫病神の九頭龍（赤井英和）に取り付かれ、やつれ果てながらも兄に代わって影武者の鎧を守る仕事を続ける。そこへ勝海舟がやってきて「新しい日本国」を作る仲間に誘われる。疫病神は、兄（佐々木蔵之助）に宿替えし兄は重い病に陥るが、本来の楽観的な気性から疫病神も兄から他へと旅立つことになる。そして、最後は死神のおつや（森迫永依）に取り付かれる。自分が果たすべき「本懐」が何かがわかったと、勝海舟にも別れを告げて代々の仕事である「影武者」として戦の中で死に絶えていく。これによって、死神もその役割をまっとうすることとなる。

2) アイデンティティ形成における自らの「分」

主人公は、自分から貧乏神にお願いしておきながら、妻の実家が火事になり妻子が焼け出されると貧乏神を責める。自らの行動の責任を引き受けることができずに、他者を責めている。二人目の厄病神との間でも自分自身のすべき行動を理解することができない。ところが、3番目の死神に取り付かれたところで、自分の行く道がみえるようになる。ここに至ってやっと主体的な決断をし、命をかけて取り組むことを見出すのである。エリクソンの発達モデルについて、鑪（1990）は、いわゆる「発達課題」とは異なる心の中核でのできごとであることを指摘している。エリクソンの発達モデルは、一生涯のうちには8つ段階があり、それぞれの時期に危機が訪れ、これを越えていく必要のあることを示したものと理解することができる。この映

画をみると、主人公の生き方を通して、自ずから選択した結果起きてくることを引き受けていくことの難しさや危機について理解することができると考えられる。さらに言えば、自分の分をわきまえるまでには、自分で自分の責任を取ることができない時期があること、つまり、モラトリアム期間が必要であることをとらえた映画ということもできる。さまざまな発達モデルが示しているように、初期には十分に周囲からの働きかけや世話が必要なのであり、自分では責任が取れないし、取らなくてもよい時期をくぐり、いわば失敗を何度も繰り返すことを周囲や社会が許容することが求められていると言い換えることもできる。その結果、周囲の世界を当てにすることができるようになり、やがて、自分らしくあることや、そのためには引き受けなければならない役割や責任のあることにも徐々に気づいていく、という過程だと理解できる。

この映画からは、自分らしさというものの発達過程における危機や、その先の行き着いたところで獲得される自らの「分」ということについて理解を深めることができると考えられる。

さいごに

以上、4本の映画を取り上げて、「自分らしさ」について臨床心理学的な観点から検討してきた。自分らしさを培うためには、“new object”となりうる誰かがいることや、この“new object”もやがては両親など慣れ親しんだ対象と同じような一面をもっていることに気づいていくという、移行対象的な存在でもありうることについて理解する素材となりうるものであった。さらに、集団の中では周囲と合わせることを求められるために、自分を見失うことも起きうるものであり、自分らしくいるためには一度は集団から身を引いて、自律性を育てていく抱える環境が必要である点についてもみることができた。また、自分らしさについての内的な変容過程では、とらわれから解かれていく過程のあることや、自分らしさの形成過程では、モラトリアムの期間が補償されることにも意味あることをみていくことも可能であった。いずれの映画においても、「自分らしさ」の発達には他者の存在が意味をもつものであった。

これらの映画は、発達心理学（2007年度後期）、カウンセリング論（2008年度前期）の講義で、心の発達や臨床心理学・カウンセリングを理解するよい素材を含むものとして鑑賞をすすめたものである。『サイドカーに犬』は、一部のシーン（ヨーコが隣の自転車のサドルを取り付けて帰った、と言ったとについて、薫が、その取られた人はどうしたのかと尋ねる）を講義のさいに上映した。このシーンの今後の活用方法として、薫がヨーコに質問したところでビデオを一時停止し、「あなたならどのように答えますか？」と受講者に質問することも可能である。このように用いると、学生にとっても主体的に講義に参加することができ講義素材としての意義はより高いものとなる。しかし、自宅でDVDを見る場合であっても、講師の主張と自らの理解の違いを確認するためにみることも可能である。いずれにしても、映画のような日常的な素材を用いることは、「とっつきにくい」「難しそう」な学問だと時には感じられる心理学を、本質的にはだれにも身近なものであることを実感しやすいものにできると考えている。これまでも指摘したことだが、ここに示したのは、ある映画についての一つ視点からの理解であって、絶対的な正解ではない点について、言葉としても学生にも伝えて、さまざまな意見を交わすことのほうがむしろ教育的な素材となりうると思われる。

映画に登場する人物は、実際のカウンセリング場面のクライアントと面接者のように、お互いの発言の意図をその場で確認することはできないのである。その点では、筆者の解釈の域を

出ない側面もあり、学生の批判的意見が出ることはなおさら重要であると考えている。目指しているのは、講義を学生がより関心をもって聞き、部分的であっても主体的に参加しやすくするための素材なのである。

本稿では、自分らしさをテーマに4本の映画を検討したため、『西の魔女が死んだ』に描かれている「死」という対象喪失のテーマは、思春期の自己形成過程では重要であるが、今後の検討課題として残った。

文献

- ガーデンシネマ・イクスプレス (2008) : 『西の魔女が死んだ』 劇場用パンフレット, アスミック・エース エンタテインメント.
- 早川寿司乃 (1994) : 解説, 梨木香歩 (1994) : 西の魔女が死んだ, 新潮文庫.
- 乾吉佑 (1980) : 青年期治療における “new object” と転移の分析, 小此木啓吾 (編) : 青年の精神病理 2, 弘文堂, pp249-276.
- 狩野力八郎 (2007) : 日本における「A-T プリット治療」の概観, 精神分析研究, 51 (4), 349-358.
- 北山修 (1993) : 自分と居場所, 北山修著作集 日本語臨床の深層, 第3巻, 岩崎学術出版社.
- 梨木香歩 (1994) : 西の魔女が死んだ, 新潮文庫.
- 梨木香歩 (2004) : ぐるりのこと, 新潮文庫.
- 『サイドカーに犬』フィルムパートナーズ (2007) : サイドカーに犬 [DVD], PONY CANYON.
- 『サイドカーに犬』フィルムパートナーズ (2007) : 『サイドカーに犬』劇場用パンフレット, ビターズ・エイド.
- 佐藤多佳子 (1997) : シャベレども シャベレども, 新潮文庫.
- 『シャベレども シャベレども』製作委員会 (2007) : シャベレども シャベレども [DVD], アスミック・新潮社.
- 『シャベレども シャベレども』製作委員会 (2007) : 劇場用パンフレット, アスミック・エース エンタテインメント.
- 鐘幹八郎 (1990) : アイデンティティの心理学, 講談社現代新書.
- 『憑神』製作委員会 (2007) : 憑神 [DVD], 東映ビデオ.
- 『憑神』製作委員会 (2007) : 『憑神』劇場用パンフレット, 東映事業推進部.
- 恒吉徹三 (2002) : 臨床心理学的視点を理解するために視覚的媒体を用いること, 山口大学教育学部教育実践総合センター研究紀要, 14, 189-196.
- 恒吉徹三 (2004) : 臨床心理学的視点を理解するために視覚的媒体を用いること (その2), 山口大学教育学部教育実践総合センター研究紀要, 17, 133-142.
- 恒吉徹三 (2005) : 臨床心理学的視点を理解するために視覚的媒体を用いること (その3), 山口大学教育学部教育実践総合センター研究紀要, 19, 135-142.